



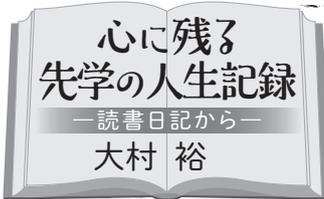
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.237
2023.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第34回

民俗学者・渋沢敬三の「夢」(その2)

—引き続き、由井常彦・武田晴人・木村昌人・伊東正直・浅井良男『歴史の立会人 昭和史の中の渋沢敬三』(日本経済評論社2015年)と渋沢雅英『父・渋沢敬三』(実業之日本社1966)を読む—

(承前) 1925(大正14)年に渋沢敬三が私費を投じて建設した「アチック・ミュージアム」では、少なからぬ研究者や職員が採用され、各地の漁業研究、「奥美濃の花祭り」、「岩手の伝統的名子経営」などの本格的研究が行なわれ、機関誌も発行された。研究員等の給与と調査研究費用、多数の刊行物の出版費用など莫大な経費は、敬三のポケットマネーから注ぎこまれたことであろう。敬三は、「いつも夜、銀行から帰ってくると、真直ぐに『アチック』や『文庫』に出かけて行き、遅くまで同人と話し込むのが常となった。母屋に帰って来るのは12時過ぎ、時には2時、3時になることも珍しくなかった。」という(渋沢雅英『父・渋沢敬三』以下「伝記」)。これには当然、周囲から批判の声が上がる。第一銀行の内外では、学術研究と銀行業務を兼務する敬三に対し、批判が絶えなかったという(由井常彦の指摘)し、敬三の妻も「あまり学問ばかりやっていて家庭を省みない」とよく不平を言っていたと子息の雅英が証言している(伝記)。余談であるが、明治の文豪森鷗外も「二足の草鞋」を履いている(軍医としての仕事と文筆活動)ことに対し、周囲(陸軍)から批判が絶えなかったと言われている。こうした批判に対して敬三は、「皆は暮を打ったり、ゴルフをしったりして結構時間を使っているんだから、文句はないじゃないか」と聞き直っていたという(伝記)。かつて高校教員と考古学研究の「二足の草鞋」を履いていた私も、敬三のためにもう少し弁護をしておこう。

政財界において名をなすとか、私利私欲を追及するとかいう野望と無縁な敬三は、誰からも警戒されなかったし、血筋の良さに加えて自然に滲み出てくる高い教養と品性に、財界の長老たちの期待が集まっていた。財界の大物・池田成彬の推薦を受けて日本銀行副総裁に就任したのは1942(昭和17)年、何と敬三46歳の若さであった(2年後総裁に就任)。現代では考えられないことである。本業だけに汲々とする人々には期待出来ない新鮮な視点や、形に現れない存在感を醸し出していたから、こうした異例の人事が行なわれたのではないかと思考する。また本業以外の仕事(学術研究)で得たノウハウを本業に還元出来るというメリットもある。例えば渋沢敬三は、学術面では共同研究を重視した。

「一匹狼では本当の仕事はできない。正しい意味での共同作業の中に学問の最も大きな可能性があると父は考えていた。」(伝記)
「何を自分はアチックに見出さんとしつつあるか、人格的に平等にしてしかも職業に、専攻に、性格に相異なった人たちの力が仲良き一群として働く時、その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味わいたい。チームワークのハーモニアス・デヴェロップメントだ。自分の待望は実にこれであった」(敬三のエッセイ。伝記からの孫引き)
このチームワーク重視の方針は、銀行の仕事にあっても活かされている。すなわち、

「彼(引用者註：敬三のこと)は部長として自分の意志決定や指示について、上からの権威主義的な命令とならないよう、電話を含めて内外の情報を、部の全員と共有するよう努めたのであった。」(由井常彦の指摘 傍点は引用者)

というのである。また単に金貸し業に徹するのではなく、融資先の成長を楽しむ姿勢は、有望な野にある研究者を見つけ(例えば民俗学者の宮本常一など)、育てる姿勢と一致している。武田晴人は以下のように書いている。

「銀行家として貸出先の企業に寄り添うように見守り、それを育てる、成長を期待する敬三の姿は、民俗学を志す若い人たちに学資を提供し、地方の志ある人たちを見出して援助する姿と共通する。」

ちなみに、一面識もなかった考古学者の中谷治宇二郎にも、『日本石器時代文献目録』の刊行資金を岡茂雄の名義で援助している(岡、1974)。まさに「表の仕事(銀行)」と「裏の仕事(学術研究)」が表裏一体となっていることが分かるであろう。「裏の仕事」で得たノウハウを「表の仕事」に活かし、「表の仕事」で得たノウハウや名声を「裏の仕事」に活かしていたのではあるまいか。学術研究は敬三にとって、決して無駄なことではなかったのである。

敬三は、日銀副総裁や総裁、大蔵大臣という名譽ある地位についても全然うれしいというようなそぶりは見せなかった。しかし、『豆州内浦漁民史料』の刊行によって農学賞を受賞したときには、日頃外部のことを家庭ではほとんどしゃべらない敬三が、そのことを大変喜んで、しばしば食卓の話題にしていたという。晩年、長年の学術研究への功績に対し、朝日新聞社から「朝日賞」を授与されたときには、壇上において目に涙を一杯ためて、答辞を述べたという。さらに、東洋大学から「名誉博士」の称号をもらったときには、子供のように喜んでいと雅英は書いている(伝記)。「自分(引用者註：敬三のこと)の一番の生命としたものは実業ではなく、やはり学問であった」(伝記)のである。

戦後、新円切り替えや財産税の徴収、そして財閥解体などが「渋沢大蔵大臣」のもとで行なわれた結果、莫大な富を敬三は失った。三田の敷地三千坪の豪邸は国家に物納され、昔執事が住んでいた崖下の小さな家屋に引っ越した。妻にも家を出て行かれ、失意のどん底にあった時もあったが、敬三は「ニコボツ」(にこにこしながら没落するという意味)と言って、平気な顔をしていたという(伝記)。富も社会的地位も学術研究に比べたら、敬三にとって二義的であったのであろう。大蔵大臣退任後、「公職追放」となるが、却って念願の学問の道に没頭出来たと木村昌人は評価している。「学問三昧の生活」という夢が実現したから、こうした辛酸に耐えられたのではないかと私は想像しているのである。

参考文献：岡茂雄『本屋風情』(平凡社1974年)

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第34回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第230回)	松森多恵 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第9回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「新版 山梨の遺跡」	小澤英幸 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第9回)

山本 暉久

9. 大学での考古学 その6

ー卒業論文への取り組みと資料収集旅行①ー

1967(昭和42)年4月、大学3年生となり、この年は、多くの遺跡調査に参加した。大学3年までは、できるだけ多くの発掘調査に参加して経験を深め、大学4年生になると卒業論文の作成に集中しようと思っていた。さて、卒業論文のテーマをどうするか、ということが大学3年生になって大きな問題となってきた。大学入学以来、興味の対象は縄文時代、とくに縄文時代文化の起源の問題に関心をいだいてきた。そのころ、「AAS」(“Academic Archaeology Society”の略)と呼ぶ、今思うと、いかにも仰々しく名づけた文学部の同級生たちが集まった勉強会がもたれるようになり、研究発表や読書会などを行いつつ、その成果をガリ版刷りの「AAS会報」として刊行していた。3号雑誌で終わってしまったが、大学2年生の時に、その第3号(1966.10.3)に、第3回研究発表要旨として、「土器出現期～縄文文化確立迄の編年とその文化の研究」を掲載した(写真参照)。これが原点となって、自ずと卒業論文のテーマが定まったのである。こうしたテーマを選んだのは、その当時ようやくわかり始めた、燃糸文系土器群以前の土器の発見であった。とくに刺激を受けたのは、東京考古学会(明治大学文学部考古学研究室)が刊行する『考古学集刊』第3巻第1号に掲載された鎌木義昌・芹沢長介による「長崎県福井岩陰―第1次発掘調査の概要―」(1965.6.25刊)であった。隆起線文土器と爪形文土器が細石器とともに層位的に出土し、土器出現期の様相が明らかにされたのである。この真っ赤な表紙の『考古学集刊』第3巻1～4号(1966-1967)は、当時の私にとってバイブルに近いものであった。今は、考古学関連の雑誌は数え切れないほど全国各地で刊行されているが、当時はまだ少なく、國學院大學考古学会の『上代文化』と並んで、あこがれに近い研究雑誌であった。1967年10月刊行の『考古学集刊』第3巻4号には、池水寛治による「鹿児島県出水市上場遺跡」の報告が掲載され、南九州において細石器と爪形文土器が伴出し、旧石器時代末に細石器とともに隆起線文土器・爪形文土器が共伴することが一層明らかにされたのである。

こうした研究動向に刺激を受けて、旧石器時代(当時は「先土器時代」と呼ぶことが一般的であった)末から土器出現をみて縄文時代が成立していく過程を明らかにすることを卒業論文のテーマに選んだのである。その視点は、土器の出現=縄文時代の

開始ととらえるのではなく、土器の出現は、縄文時代文化成立の契機とはなったであろうが、隆起線文土器と爪形文土器(その当時、「最古土器群」と呼んだ)の時期は、旧石器時代から縄文時代へと移行する「過渡期」として認識し、真の縄文時代の確立は、燃糸文系土器群の成立期に求めるという立場から論ずることにあった。

そのようなテーマを大学3年生になって選んだのであるが、肝心の資料に直に接したのではなく、研究雑誌や報告書などから得た知識であったため、まずは、各地に出かけて資料を実際に見学することとしたのである。当時、大学3年生の秋になると、所属する学科では、毎年教員が引率して「国史研修旅行」が行われていた。この年は、東北方面と九州方面に分かれて実施されることになった。私は、九州方面に参加することにした。1967年10月23日～11月1日の10日間、福岡県博多駅に集合し、九州を一周して、大分県中津駅で解散する旅程であった。引率者は、鹿野政直(助教授・当時)、上杉允彦(助手・当時)、参加学生は18名であった。私は、10月24日、平戸まで参加したあと一行と別れ、独自の資料見学旅行に入った。まず、佐賀県唐津市唐津城に展示されていた、西北九州の細石器やナイフ形石器などを見学し、さらに熊本を經由して南下し、出水市の上場(うわば)遺跡の細石器と爪形文土器などを見学した。この遺跡は、前年の1966年4月に、池水寛治先生(鹿児島県立出水高校教諭)が調査したばかりの遺跡であった。池水先生をお訪ねしたところ、「君、今日はどこか泊まるとこあるのか?」と尋ねられた。「いえ、まだ決めていません」とお答えしたら、「だったら我が家に泊まっていけ」とのお言葉、ありがたく泊まらせてもらうことになった。翌日、出水高校に出向いて資料室に保管されている上場遺跡の資料を見学することができた。

その後、九州を離れて、間壁忠彦・葎子ご夫妻が勤務する岡山県倉敷考古館所蔵の鷲羽山遺跡などのナイフ形石器を見学した。さらに、長崎県福井岩陰遺跡出土資料の一部が鎌木義昌先生(岡山理科大学教授)が保管されているとのことで、岡山理科大学に鎌木先生を訪ねた。そのさい、先生に「資料の写真を撮るだけで、実測しないのか?」と云われ、福井岩陰の細石器を1点実測することになってしまった。すると先生は、私が実測する背後で、じっとその作業と下手な図を見続けているのである。これには、プレッシャーは半端なものではなかった。旅行の最後は、大阪府交野市神宮寺遺跡出土の土器資料を、交野市役所を訪ねて見学した。縄文時代早期のいわゆる「ネガティブ押型文」と呼ばれる土器で、当時、押型文の起源にかかわる土器として注目されていた土器であった。かくして第1回目の卒業論文資料見学の旅が終わった。次回は、4年生になって実施した北海道・東北方面の資料見学旅行について触れてみたい。



▲AAS会報第3号 1966.10.03

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科国史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英次記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工業普通先生です。

J レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 230

阿久遺跡 ～長野県諏訪郡原村

松森 多恵

原村は八ヶ岳のふもと、標高900～1300mに位置する高原の村です。「日本で最も美しい村」として、絶景の星空や自然あふれる景観、新鮮な高原野菜といった“高原”的魅力でいっぱいの原村ですが、やはりここではもう一つ。茅野市さん(前号)、富士見町さん(前前号)と接する原村もまた、「縄文」がすごい! 村内98遺跡、そのほとんどが縄文時代、あるいは縄文時代を含む複合遺跡です。日本遺産『星降る中部高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅—』(平成30年認定/14市町村)には構成文化財として、①国史跡 阿久遺跡、②顔面装飾付釣手土器(前尾根遺跡)の2件が登録されています。

というわけで前置きが長くなりましたが今回は、原村が誇る国史跡・阿久遺跡をご紹介します。残念ながら発掘調査自体は私が配属される遥か前に終わっており、直接携わる機会はなかったのですが…。やはり「原村といえば、阿久!」ということで、少しでも多くの方に知っていただければ幸いです。

阿久遺跡は八ヶ岳西南麓、大早川と阿久川に挟まれた東西へ細長く伸びる尾根と、阿久川に面したなだらかな尾根上から南斜面に立地します。昭和46年の分布調査でその存在が確認されていましたが、当時は大部分が山林で「遺跡」として認知される範囲も狭く、遺跡名も「塩水遺跡」と呼ばれていました。

実際にその全貌が明らかになるのは更に4年後、昭和50年から始まった中央自動車道建設に伴う発掘調査(第1～3次調査)です。調査では遺跡の範囲が尾根上まで広がる事が確認され(第1次)、本格的な調査によって縄文前期後半の住居址と大量の石(環状集石群)、その下から前期前半の住居址、方形柱穴列と土壙群が発見されます(第2次)。そして調査区のすぐ脇まで中央道の建設が進み、早期の調査完了を迫られていた昭和52年(第3次)、阿久遺跡が「縄文時代前期を通して営まれたムラ」と、「立石・列石を中心に大規模な環状集石群が回る祭祀場」であったことが判明します。“前期縄文時代の転換”と言われたこの発見に、住民をはじめ多くの研究者、メディアからも注目が集まり、県内外を巻き込んだ大規模な保存運動が展開しました。結果、中央道の路線変更は叶いませんでしたが、遺跡部分は埋め戻し、上から盛土をして保存されることが決定し、4次調査を終えた昭和54年には、阿久遺跡約5万6千㎡が国史跡として指定されました。

阿久遺跡に栄えたムラは、縄文時代前期を中心に、縄文時代中期、平安時代が確認されています。このうち遺跡の中心時期

となる前期は大きく5期(I～V期)にわかれ、その様相は集落から祭祀場へと、次第に変化していったことがわかっています。

I期(前期初頭)に始まった阿久のムラは、II期(前期前葉)には中央に倉庫と広場をもつ馬蹄形集落へと発展します。10軒程度の住居址が3期ほど存在したこのムラは、次のIII期へ続くことなく断絶しますが、これは大地震によってムラが壊滅的な被害を受け、放棄されたものと考えられます(西隣に立地する同時期の遺跡から、年代の重なる断層が見つかります)。新たに人々が戻ったIII期(前期中葉)のムラは中央広場に墓と考えられる土壙が出現し、ここに中期集落へと繋がる集落構造の原型をみることができます。

祭祀場としての色が濃くなるのは、IV期(前期後葉)以降。ムラはIII期の集落構造を踏襲するものの、その中央には「立石」や「列石」といった配石遺構をはじめ、10万～30万個もの石を使った環状集石群(直径50～150cm×深さ30cm前後の穴に拳大の隙200～300個を詰めた「集石」300基以上が、幅30mのドーナツ状(長軸120m×短軸90m)に広がる遺構)など、大規模な祭祀場の遺構が発見されています。II・III期とまた異なる柱穴数の方形柱穴列も祭祀に関わる施設であった可能性があり、生活の場であるムラと祭祀の場が共存しているという点は大きな特徴です。

内側から造られ始めた環状集石群は次第に外側へと広がり、徐々に居住域を圧迫していきます。V期(前期後葉)の住居址はわずか2軒、うち1軒の大型住居は集会等に使用されたと考えられます。ムラと祭祀場の共存関係は消失し、大祭祀場のみが主体となっていきますが、この大祭祀場もV期をもって終焉を迎えます。阿久の地に再び縄文人が戻ってくるのは、約500年を経た縄文時代中期中頃となるのです。

蓼科山を拜望するように立石・列石を中核に据え、その周囲に墓と考えられる土壙群、外側に環状集石群がドーナツ状に廻り、さらにこの外側に住居址群が配置される、三重構造の阿久遺跡。実際にどのような祭祀が行われたのか、環状集石群とは何だったのか。謎は尽きませんが、縄文の人々の生活の場として、また居住域から祭祀の場へと変遷していった過程と、墓制や祭祀といった社会の精神構造へ迫る全国的にも例のない遺跡として、後世へ繋いでいくべき史跡です。昭和50年の発掘調査開始から半世紀が経過しようとする今、当時調査に携わった方々のその成果を、史跡整備も含めこれからは自分たちが、地域に還元していくことが使命だと思います。まだまだ勉強させていただくことばかりの毎日ですが、地域の皆さんに愛される、誇りに思ってもらえる、そんな史跡を目指して、日々精進していきたいと思っています。

現在阿久遺跡の出土品は、八ヶ岳美術館(原村歴史民俗資料館)に展示されています。今年は秋季企画展『縄文前期の巨大祭祀場 阿久(9/9～1/8)』も開催されますので、ぜひ一度、足を運んでいただければと思います。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは小野寺洋介さんです。



▲立石(復元・発掘調査当時の様子)

▲中学生見学授業

考古者の書棚

「新版 山梨の遺跡」

山梨県考古学協会／山梨日日新聞社(1998)

小澤 英幸

はじめに

埼玉県で生まれ育ち東京の大学で考古学を学んだ私にとって山梨県のイメージというものは「世界遺産富士山」、「武田信玄」、「ほうとう」といった漠然としたものであった。大学に入学後は友人や後輩たちと各地の博物館や遺跡を訪れるようになり、山梨県もたびたび訪問するようになった。当時を振り返ると釈迦堂遺跡博物館で見学した1000点を超える土偶や精巧な土器に感動したこと、金生遺跡で復元された配石遺構や八ヶ岳を眼前に望む素晴らしい景観を目にし縄紋時代の人々に思いを馳せたことを思い出す。また甲斐銚子塚のスケールの大きさや笛吹市経塚古墳の八角形の様子に驚いたことを鮮明に覚えている。その後周りからの勧めもあり山梨県内の自治体に就職した私は山梨県の遺跡の豊富さやバリエーションの豊かさを知り、それまで漠然と抱いていた山梨県に対するイメージを改めることとなった。イメージを改めるきっかけとなったのが今回紹介する『新版 山梨の遺跡』である。

本書の内容

本書は山梨県考古学協会によって刊行された山梨県内の遺跡や遺物を紹介する概説書であり、1983(昭和58)年に刊行された『山梨県の遺跡』に続く新版である。執筆は山梨県の考古学研究を担う研究者によって行われ、わかり易くも詳細な解説が豊富な図版とともになされている。

内容は旧石器時代から中・近世までの山梨県を代表する遺跡が174遺跡が紹介されている。本書の最大の特徴は写真図版の豊富さである。全てがカラー写真であり遺構や遺物のみならず発掘調査の様子や遺跡周辺の様子を収めた空中写真もあり、現地の様子を読者が視覚的に理解する手助けとなっている。また巻末には各時代ごとの用語集や山梨県の考古学略年表、掲載遺跡一覧が収録されている。用語集は各時代ごとに、掲載遺跡は各市町村ごとに纏められており検索が容易となっている。遺跡名は読みが難解なものも多くあることから用語集と合わせて全てに振り仮名が付されているなど考古学の専門的知識を持たない一般の読者に対しても配慮がなされている。

以下では本書で紹介されている遺跡の中からいくつかの遺跡を紹介したい

釈迦堂遺跡群は中央自動車道釈迦堂パーキングエリア建設に伴い調査が行われ、旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であり1000点を超える土偶が出土した遺跡としても著名である。現在はパーキングエリアに姿を変えてしまい遺跡の面影を感じられないが、土偶や土器などの遺物と合わせて調査中の様子が写真で紹介されており迫力ある現地の雰囲気伝わってくる

銚子師屋遺跡は縄紋時代と平安時代の複合遺跡であり、本書の表紙に写真が掲載されているほぼ完形で出土した円錐形土偶や人体文様付有孔鏝付土器を含めた205点の出土品が

重要文化財に指定されている。円錐形土偶や人体文様付有孔鏝付土器は国内のみならず国外の展示会にも貸し出され、日本を代表する縄紋時代の顔となっている。また市民によって円錐形土偶は「子宝の女神 ラヴィ」、人体文様付有孔鏝付土器には「ピース」の愛称が付けられ広く親しまれるとともに地域の歴史に触れるきっかけにもなっている。

甲府盆地の西側地域は南アルプスや巨摩山地から流れ出る河川によって砂礫が厚く堆積する扇状地が形成されている。いくつもの河川が合流する下流では氾濫が多発する水害地域となっている。そのためこの地域では氾濫の影響により遺跡が残らず「遺跡の空白地帯」と考えられてきたが中部横断自動車道及び国道のバイパス建設に伴う調査により新たに遺跡が確認され重要な発見がなされてきた。本書ではそうした重要な成果についても紹介がなされている。

大師東丹保遺跡では弥生時代から中世までの様々な遺構・遺物が検出されている。中でも鎌倉時代の低地開発を主導した有力者の館跡と推測される建物跡や水路跡、杭で護岸がなされていた水田跡が検出され、館と周囲の村の一部が確認された点は重要な成果である。また良好な状態で出土した大量の木製品も注目される。下駄や曲物、櫛、扇など日用品のほか、呪符木簡や齋申、人形などの呪術・祭祀具も多く出土している。木製品の中でも特に注目されるのは大型の網代であろう。『一遍上人絵伝』などの鎌倉期の絵画資料に見られる網代垣や網代壁と比較検討がなされており重要な資料である。以上のように遺構・遺物の面から当時の日常生活の様子を知ることの出来る重要な遺跡である。

人々の水害との闘いの様子を伝える遺跡は山梨県を特徴づける遺跡と言える。国の史跡である「御勅使川川日堤防(将棋頭・石積出)」は古くから暴れ川として知られる御勅使川、釜無川の治水、利水に関わる堤防遺跡であり、数ある史跡のなかでも3件しかない河川堤防の一つである。石積出、将棋頭は石積みみの堤体を現地で見学することが可能なので、使われている石材の大きさや、一部露出展示されている基礎の様子など如何にして先人たちが洪水と戦ってきたかを現地で感じ取って頂きたい。榊形堤防では現在史跡整備が進められ、史跡公園として一般公開が予定されているので、こちらにも足を運んで頂きたい。

おわりに

本書で紹介されている遺跡の中から、いくつかの遺跡を取り上げた。本書ではこのほかにも数多くの魅力的な遺跡が紹介されている。拙い文章のため十分に本書の内容を伝えられなかったが、山梨の遺跡に興味がある人にはぜひ手に取って頂きたい一冊である。

アルカ通信 No.237

発行日 2023年6月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp